

## 【植物ニュース】

長野県植物研究会誌第 55 号に引き続き、「植物ニュース」をお届けします。今回は 195 から 202 の記事を掲載します。

新産地報告や観察記録など簡単な記事を載せたいので、掲載された記事を参考にして執筆し、とりまとめ役の大塚あて (kootsu51@yahoo.co.jp) に記事をお寄せください。件数が多い投稿の場合は、個別の新産地報告などへの変更をお願いすることがありますので、ご了承願います。

なお、ニュースの記事を引用文献とするときは、以下のような形を推奨します。

「星山耕一 (2022) 植物ニュース 188. ヤマナシテンナンショウ (サトイモ科), 長野県植物研究会誌 55 号 p.215. (複数ページの時は pp.215-216.)」。あるいは、

「大塚孝一編 (2022) 植物ニュース. 長野県植物研究会誌 55: 213-216.」

(大塚孝一)

### 195. キヨスミヒメワラビ (オシダ科)

*Dryopsis maximowicziana* (Miq.) Holttum et Edwards

キヨスミヒメワラビは暖温帯性のシダで、葉柄や葉軸に白い鱗片が多いことからシラガシダとも呼ばれる。長野県では木曽や下伊那地方に分布するが、近年小谷村や塩尻市でも発見されている。今回、長野県北部の飯綱町髪山 (744m) で採集した



195. キヨスミヒメワラビ

とりまとめ：大塚孝一 kootsu51@yahoo.co.jp

ので、北部での記録として報告する (飯綱町髪山, 2022.8.7 大塚採集)。

髪山はスギ植林地が多く、シダの種類も多い。ベニシダやアイアスカイノデ、ホソバイヌワラビ、コバノイシカグマ、イワガネソウなどの暖温帯性のシダも見られ、本誌 51 号にシダ植物のホットスポットとして紹介した。イワガネゼンマイもあり、N型と S 型両方が混在する。その他、フモトシケシダ、ホソバフモトシケシダ、タマシケシダ、オオホソバシケシダ、タニヘゴ等もあり、ホクリクイノデも多い。

(大塚孝一)

### 196. イワガネゼンマイ (イノモトソウ科) の N型・S型

*Coniogramme intermedia* Hieron.

阿萬他 (2011) は「シデコブシ」第 2 卷 1 号で、イワガネゼンマイに 2 型 (N 型・S 型) があることを報告した。N 型は Northern type、S 型は Southern type を意味する。長野県には N 型が広く分布し、S 型は県南部と北部に分布する。これらは現在千葉大学綿野研究室で遺伝子レベルの研究がされていて、今後それぞれ新分類群とされるだろう。形態的には、N 型は葉形が三角形状で、羽片の数は少なく羽片の先端は徐々に縮まる。葉の色はやや黄緑色。S 型は羽片の数が多く葉身はやや細長く、羽片の先端は急に縮まり、葉の色は深緑色でやや光沢がある。また N 型においては標高 1000m 位を境に低標高地とやや標高が高い場所に生ずるものでは遺伝的に異なる (阿萬他 2011)。

S 型を確認できた自生地：栄村小滝、飯山市北竜湖、飯綱町髪山、長野市鬼無里財叉、白馬村小谷内、同佐野坂、天龍村中井侍、同伊那小沢など。

(大塚孝一)

### 197. ウスヒメワラビ (イワデンダ科)

*Acystopteris japonica* (Luerss.) Nakai

NAC199697

2022 年 8 月、辰野町の横川渓谷で標高 1000 m 付近において、シラネワラビ *Dryopteris expansa* (C.Presl) Fraser-Jenk. et Jermy の大きな群落の中にウスヒメワラビが数株だけ混じって見られた。周囲



196. イワガネゼンマイ N型



196. イワガネゼンマイ S型



198. シロテンマ

には、岩場にはホソバコケシノブ *Hymenophyllum polyanthos* (Sw.) Sw. やヒメスギラン *Huperzia miyoshiana* (Makino) Ching が見られ、県南部を中心に分布する暖地性シダのウスヒメワラビがこのように標高が高い山地の奥で見られるのは特異である。横川渓谷の南側、小横川の同標高付近には山地の標高の高い所に分布するウスヒメワラビモドキ *Acystopteris taiwaniana* (Tagawa) Á. et D.Löve があり、一方、西側木曽谷の釜の沢周辺ではウスヒメワラビが見られる。釜の沢のウスヒメワラビは包膜に腺毛があるものが見られ、ウスヒメワラビモドキとの中間型と思われる所以、それと同じものである可能性がある。

(上野勝典・上野由貴枝)

198. シロテンマ (ラン科)  
*Gastrodia elata* Blume var.*pallens* Kitag.

NAC199725

2022年7月に塩尻市のスギ林内にて、小型のオニノヤガラ *Gastrodia elata* Blume のよう形をした白色のシロテンマが一株のみで見られた。本種は、花が白色になること以外に背丈が20~30cm程度と低く、軸が細いことなどオニノヤガラとは異なっている。また「日本のランハンドブック」(解説遊川, 2015, 文一総合出版)では花の形態や花期にも違いがあるという。長野県植物誌補遺(2002)では品種の学名が当てられているが、上記のオニノヤガラとの違いから、遊川(2015)では別種が適当であろうと書かれていた。花はまだ開花途中であったが翌日に再来するとすでに枯れかけており、花期が2、3日程度と非常に短いことから、見つかる機会が少ないのでないかと推測される。長野県では松本市での記録があり、「神奈川県植物誌」(2018)によれば日本での分布は本州中部とされるが、「高知県植物誌」(2009)にも記録がある。

(上野勝典・上野由貴枝)

199. ナガオノキシノブ (ウラボシ科)

*Lepisorus rufofuscus* T.Fujiwara (*L. angustus* auct. non Ching)

日本植物分類学会誌 *Acta Phytotaxonomica et Geobotanica*.73巻3号(2022)に、日本のナガオノキシノブが新種として記載された(Fujiwara&al. 2022)。和名はそのままで、学名が新しくなった。遺伝子解析の結果では、中国産(タイプ)のものとはかなり異なる。根茎や葉の鱗片も広く異なっている。今まで図鑑等では、*L. angustus* Ching か *L.thunbergianus* var.*angustus* Ching が使われてきたが、今後は別種として扱われるのが良い。今のところ日本固有種で、染色体数は

2n=52。論文には長野県の産地として、[諏訪郡富士見町入笠山,M.Akasu s.n.(TNS414210), 木曽郡王滝村,kuroishibara, Jul.26.1972, 奥原弘人 s.n.(TNS414204)]が引用されている。

(大塚孝一)

#### 200. キミノウラジロノキ (バラ科)

*Micromelis calocarpa* (Rehder) M.Aizawa

日本植物分類学会誌 *Acta Phytotaxonomica et Geobotanica*.72巻1号(2021)に、逢沢峰昭(2021)による「中部日本において見過ごされていた樹種：キミノウラジロノキ」(英文)が報告された。本種はウラジロノキ *Sorbus japonica* var.*calocarpa* の変種として記載されたが、近年ではウラジロノキの品種あるいは異名として扱われてきた。今回の遺伝子レベルや葉の形態的な研究により、ウラジロノキとは独立の種であることがわかった。標本調査から、本種はウラジロノキの分布域と異なり、中部山岳の山地帯上部から亜高山帯下部(1500-2100m)に見られる種であるという。さらにナナカマド属 *Sorbus* やアズキナシ属 *Aria* として扱われることが多いが、旧アズキナシ属 *Micromelis* として扱われるのが良いとされた。

キミノウラジロノキは「長野県植物誌」(その未確認種含む)や「長野県植物目録」に記録がないが、本論文の中に、長野県八千穂のサンプルがあり、また長野県での分布を八ヶ岳、赤石山脈、秩父山脈とした。長野県のフロラに加えられるものである。

(大塚孝一)

#### 201. モモイロラショウモンカズラ (シソ科)

*Meehania urticifolia* (Miq.) Makino f. *rosea* J.Ohara

本種はラショウモンカズラの桃色の花をつける品種で、1985年に愛知県から記載された(大原 1985; 植物地理・分類研究 33:72.)。池田他(2021)により「モモイロラショウモンカズラ(シソ科)の学名と核型および新産地」と題して、植物研究雑誌第96巻4号に新産地報告が載り、2019年に福井市で採集され北陸地方では初めてとされた。韓国で

多く採集されているとのこと。日本での分布は広島、福井、岐阜、愛知、長野の各県とした。

「長野県植物目録」には記載がなく、「長野県植物誌」のラショウモンカズラの解説中に、奥原弘人により木曽地方から見いだされ、アカバナラショウモンカズラ *f.purpuriana* M.Mizush. (未記載)と命名されたとある。池田他(2021)はアカバナラショウモンカズラも本種と同じものと考え、「長野県植物誌」の記述をもとに分布に加えている。なお、「信濃植物誌」(横内斎 1983)には同じものだが、ベニバナラショウモンカズラとして記録がある。標本等が確認できていないので、今後の精査を期待したい。

(大塚孝一)

#### 202. フモトミズナラ (ブナ科)

*Quercus mongolica* Fisch.ex Ledeb.var. *mongolicoides* (H.Ohba) M.Aizawa

フモトミズナラは関東地方(栃木県、群馬県)と中部地方(長野県、愛知県、岐阜県)に分布するコナラ属の種類で、長野県からは県南部の飯田市での生育が確認されていた(蛭間 2009)が、北部の高山村からも確認されている(井浦・藤田 2022)。

本種は以前から東海地方でモンゴリナラ *Q. mongolica* Fisch.ex Ledeb. として扱われたことがあったが、大場(2006;in Iwatsuki et al.ed." Flora of Japan II a")によりコナラの1亜種 *Q. serrata* subsp. *mongolicoides* H.Ohba として、記載された。芹沢(2008)は少なくともコナラの種内変異ではないとして、ミズナラの変種 *Q. crispula* var. *mongolicoides* (H.Ohba) Seriz. とした。広木(2017)は独立種 *Q. mongolicoides* (H.Ohba) Hiroki として扱った。最近の遺伝子レベル及び形態学的な研究を行った Aizawa et al.(2021)により、モンゴリナラの1変種 *Q. mongolica* Fisch.ex Ledeb.var. *mongolicoides* (H.Ohba) M.Aizawa とされた。分類群としてどの位置づけをしたら良いか、植物誌改訂の執筆分担者にゆだねたい。

(大塚孝一)